

第五章 祭礼・行事

第二節 神社

人見神社（人見）

一月

❖ 歳旦祭（サイタンサイ）・初詣

新年の行事として執り行う新年祭をいう。大晦日の夜一二時近くになる五分ほど前、社殿の扉を一旦閉め、一二時を合図に神官が大太鼓を打ちならし、扉が開かれる。拝殿には社家五人、氏子総代四人、獅山会代表五人、若獅子



歳旦祭



初詣

会代表一人により新年を迎えての儀式が執り行われる。

新年を迎える諸準備は、神官はじめ五人の社家や氏子総代により注連縄張りなど、それぞれの分担で行われる。年が明けると社殿の外では、一年の感謝を捧げたり、新年の無事と平安を祈願する初詣の人たちで賑わう。

二月

❖ 祈年祭（年請えの祭り）

節分を過ぎた二二日、新しい年を迎えて行う春祈禱・春祭りを年請えの祭り（トシゴエノマツリ）といい、五穀豊穰・無病息災・家内安全の祈禱が行われる。

春祭りには、年請えの式典や直会が執り行われる。昭和四〇年頃までは幟が立ち出店で賑わったようだ。

六月

❖ 大祓（オオハラエ・オオバライ）

六月は、夏越祓（ナゴシノハラエ）。一二月には、年越しの祓が晦日に行われる。

七月

❖ 例大祭（夏祭り）

例大祭は、昭和三六年八幡製鐵の進出で漁業権を譲渡してから、中止されることになった。奉納を復活させようと、君津町西部青年会が結成され、昭和四四年、九年ぶりに神輿奉納が復活した。祭礼は神社総代以外に、祭礼支配人や祭世話人などで構成された特別

な組織を設け、その運営実施に当り、例大祭に合わせて御衣替えや神馬奉納の神事などが厳肅に執り行われる。

1、宮薙（ミヤナギ）

第一または第二日曜日、氏子総出で参道・境内・社殿及び地域などの掃除草刈りをする。宮薙とは「薙ぎ倒す」のなぎや海が平穏な状態を「風ぎ」というように草で荒れた状態を平穏な状態にして神様の御神威を高めるために草刈りをするという意味もある。

2、神馬（オメシ）の結納式

神馬奉納に先立ち六月吉日、媒酌人（獅山会長）立会いのもと、祭礼を指



神馬結納式

揮する総支配人と選ばれた馬の馬主との間で結納式と奉納式が執り行われる。

2、幟立て（ノボリタテ）

二〇日には、人見神社鳥居前に白い幟が二本立つ。



3、御衣替え（オコロモガエ）神事

人見神社の祭神三柱のお召し物を代々世襲の社家によつて着替える古儀で、旧幕時代には鎮守から特別の奉幣があつたという。

神社には古くから真菰田という神田があり、常に注連縄が張られ「菰（マコモ）草」が栽培されている。七月七日、刈り入れが行われ、刈取られた真菰草は天日干しされる。

二〇日早朝、干し上げた真菰を持つ

て人見神社に参上し神前に供え御衣を作る作業に取り掛かる。

二一日、新調の御衣（鎧）は垢離取り場で浄められ夜一〇時頃から拝殿で



刈り取った菰草(天日干し)



御衣を専用の治具で編みあげる



御衣

社家四家、祭世話人や氏子総代の代表を交えて御衣替え神事（修祓の儀・祝詞奏上・玉串奉奠）が行われる。

この後、社家四家と宮司が本殿に入り御神体三柱の御衣替えに移る。これに当たる社家たちは紙マスクにローソクの灯りだけの暗い中で、口を利かず厳粛なうちに粛々と執り行う。この儀式は代々受け継がれた神事で一般には公開されない。

4、庭上祭（テイジョウサイ）

御衣替えで取り替えた胴衣や新しく作ったときの裁ち切れを境内で燃やして納める儀式で、参拝者は境内でお焚き上げた古い御衣の灰をお守りとして持ち帰る。

5、垢離（コリ）取り

神馬は飾り付けをして、大鳥居の前に先導され、高橋家の当主が塩花で道を浄めながら小糸川へ案内、川の水で神馬を浄め鳥居前まで三往復する。現在は川に下りられないのでバケツに水を汲み神馬の足にかけて浄めている。

6、お振（ボ）り登山

お振りは一二尺、一二節の真竹二本を結束し、その真ん中に大鯛二尾を腹合わせにて吊るしたもので、若衆たちによつて大鳥居前でひと揉みもまれ、石段を一気に駆け上がり社殿へ向かう。昔は大和田から奉納された山鉾（ヤ



お振り登山

マホコ）も若衆に担がれてひと揉みしたそうだが、現在は危険だと言う事で境内山頂に飾られるだけになった。
7、お振り奉納

神前にお振り・笛・太鼓・神馬が勢揃いすると観音堂の横で笛太鼓がはやされる。

お囃子が祭り気分を盛り上げるなか、お振りが拝殿に入り東回りに一周し、拝殿から出ると同時に若衆が「鈴緒（スズオ）」によじ登り鈴緒を取り外す。お振りと鈴緒を担いだ若衆が社殿を一周しお振り奉納が終わる。



鈴緒はずし

8、神馬登山（オメシトザン）

神馬には直径一〇cm、長さ一二尺、一二節の真竹の鼻竿がつけられ、使徒として鼻竿持ち二人、左右に口取り一人と付き添いがつき神馬と一体となつて石段を駆け上る祭礼の見せ場である。
9、神馬奉納（オメシハウノウ）

お振りと鈴緒の儀式が終わると神馬を拝殿に躍りこませ、東回りに三回誘導し豊作祈願する。一二尺の鼻竿を付けた神馬を拝殿内でスムーズに回し、外に誘導するのが出し手の腕の見せ所で、神馬が滞りなく拝殿を回ると、その年は豊作だといわれている。

拝殿を出た神馬は社殿の周囲を回って神馬の繋ぎ場に繋がれ宮司から馬主



神馬登山



御幣をつけた神馬



神馬奉納(豊作祈願)

る。祭礼日は一柱が神馬に、一柱がお神輿に遷され氏子回りをする。残る一柱は社殿にあって参詣人を受け入れるといわれる。境内で一連の儀式が終わると、神社表門の大鳥居前広場で紅白



神輿へ御霊入の儀

へ授けられた御幣が鞍に安置される。奉幣の儀が終わると祭りの関係者により手打ち式が行われ神馬は下山する。10、神輿御霊(ミコシミタマ)入れ人見神社には三柱の神が祀られてい

の餅なげが行われ賑わう。

その後、お神輿は石段を担ぎ上げられ大鳥居をくぐったところで杜家から総支配人に御霊が渡されお神輿に捧げられる。御霊を頂いたお神輿は鳥居前広場で揉まれ、祭りは最高潮に達する。

11、神輿渡御（ミコシトギヨ）

鳥居前広場でお神輿が担ぎ手により揉まれたあと、お神輿は小糸川を渡り橋向地区へ渡御する。お囃子の山車と



神輿御霊入後大鳥居前で揉む

子供お神輿が後に続きにぎやかに練り歩く。



神輿渡御(神門地区)

12、お浜出の儀式

お神輿は橋向地区を出発し人見橋を渡り厄神様へ向かう。一方、神馬は裏坂口から国道を横切り厄神様へ向かう。先着している山車の笛や太鼓のお囃子で賑わう中、赤い幟が立てられた厄神社前の広場にお神輿が到着してひと

揉みした後、中央の場所に安置されると一二尺の鼻竿を付けた神馬が鼻竿持ちに導かれ、左右の口取りと付添人が神馬と一体でお神輿の周りを三回まわり奉納する。



お浜出の儀式

お浜出式は浜に関係した儀式で浜の大漁・豊漁や安全を祈願したという。獅子会長・氏子総代・総支配人・地元自治会長や議員など列席の中、宮司の祝詞奏上から始まり玉串奉奠を行う。

この時、社家四家が奉仕する「ヤエ



玉串奉奠・御供え(ヤエナリ)

ナリ」の入った強飯にナスとキュウリの料理を添えた「ヤエナリの強飯」がお神輿の御霊の前に供えられる。ヤエナリでなければならぬ理由は、例大祭が真夏の暑い時期だったことや悪病祓い（厄祓い、お祓い）の意味もありササギではなく熱病や暑気に強いヤエナリを用いた。

13、御霊返し

お浜出の儀式が終了すると、神馬の御幣は裏坂下で出し手が納め、馬主が背負って裏坂から人見神社に登る。馬主から返された



神馬御霊返し

御幣とお神輿の御霊は総支配人が取り外して社家へ、社家から社頭へ納められる。宮司によつて還御祭を執行し、神馬の御幣は宮司が改めて馬主へ与える。

一方、お神輿は神門く大和田社宅く大和田人見を渡御し五時過ぎには青蓮寺前に到着する。そこでは祭りの終わりを惜しむようにお神輿が揉みに揉まれ最高潮となり、ようやく青蓮寺境内



還御祭

の神輿堂へ納める。

十一月

❖ 七五三詣



祝七五三詣 人見神社

我が子の無事な成長への感謝とさらなる健やかな成長を願う親子連れがお参りに詣でる。男の子は三歳と五歳、女の子は三歳と七歳で祝う。
人見神社では、五歳の男児が碁盤の上に乗る元気に飛び降りる「碁盤の儀」

が行われる。

❖ 秋祭り

十一月二日は「献穀祭」とか「仏聖祭（ブッシュウマチ）」とも言われ、秋の収穫感謝の祭りである。

厄神社（神門）

一〇月

❖ 秋祭り（二三～二四日）

毎年、浜川神社本社の宮司により神事が執り行なわれる。厄神社前には「厄神社御宝前 神門講社」と書かれた大



霊亀大神付近に下がる提灯

きな幟が二本立つ。境内には「厄神社」と墨書きされた紅白の提灯が吊り下げられ、霊亀大神、古峯神社の脇にも赤い旗が揚がる。前日には社前の広場や道路の両側に、その時代を比喩する川柳入りのイラストを描いた地口行燈（ジグチアンドン）がたてられる。



浜川神社宮司によるご祈祷

二四日は、神社境内に古峯様が祀られ、神門地区の講員により古峯神社のご祈祷が執り行われる。



地口行燈



人見地区は毎年五月、第三日曜日頃に一年交代で浜川神社（東京鈴ヶ森）と古峯神社（栃木県）に参拝する。



古峯神社石碑

古峯神社（人見）

一月

❖ 初祈祷

世話人、関係者により新年の厄除けと防火の祈祷が行われる。

一〇月

❖ 秋祭り

二三日、人見・神門の講員たちにより厄神様と古峰神社のお祭が一緒に執



人見青年館 厄神様・古峯神社合同祭礼

り行われている。

人見神社の大鳥居左脇に赤い小さな鳥居がある。この奥にある古峯神社の小祠にお供物を供えお祀りする。厄神社境内に祀られている古峯神社は、二三日の厄神社のお祭りと共に神社世話人によりお祀りをする。

御嶽神社（神門）

三月

❖春の大祭（湯立て神事）

毎年一四日、神社の境内で湯立てが



湯立て神事（盟神探湯式）

行われている。正式名称は盟神探湯（カタチ・クガタチ）式で修行者が執り行う神事。この儀式は開山以来絶えることなく代々の先達に引き継がれてきた。さらに神習教で授かった方法や行者が独自で習得した儀式も取り入れ継承している。

社殿前で修祓奏上後、火打石の切火で参列者や神前に供える神饌・玉串などに纏う罪穢れを燃やしきる「火打ち」と、供え物などに纏う罪穢れを巻き取る「金木（カネキ）」で八方を祓う儀式が執り行われる。

神事は、注連縄を張った青竹と大釜の四隅が盛塩で清められ、中央に据え

た大釜で沸騰させたお湯を行者が体に浴びる荒行である。

この神事に参加した信者たちは残りの薪や炭、笹やシメを持ち帰り、門柱や軒下に吊るして火難防除や家内安全の守りとしている。

※日枝神社や坂田八幡神社で行われる「湯立て」「湯の花」は、どんど焼き的色彩の濃い神事といわれている。

六月

❖夏越（ナゴシ）の大祓

茅の輪（チノワ…茅草（ボウソウ）で作られた大きな輪）は、正月から六月までの半年間の罪穢（ツミケガレ）を祓う夏越の大祓（オオハラエ）に使用され、これをくぐることにより疫病や罪穢が祓われるといわれている。

茅の輪の起源は、善行をした蘇民将来（ソミンショウライ）が武塔神（ムトウノカミ）素盞鳴尊（スサノオノミコト）から「もしも疫病が流行したら、茅の輪を腰につけると免れる」といわれそのとおりにしたところ、疫病から



茅の輪くぐり

免れることができたという故事に基づく。くぐり方は「水無月の夏越の祓する人はちとせの命のぶというなり」という古歌を唱えつつ、左まわり・右まわり・左まわりと、八の字を描くように三度くぐり抜けると心身ともに清らかになって、あとの半年間を新たな気持ちで迎えられるという。

（日本古典文学大系『風土記』校注）

三〇日、御嶽神社では故事に倣い、境内に作られた茅草の大きな輪を信者

が左回り・右回りと八の字に三回くぐり抜けて、穢れを祓い神社にお参りする。この祭礼は、神門御嶽神社講社長の守吉男がはじめた。

一二月

✦星祭り

二二日、家族の持つ十二支歳を拝む行事で、毎年冬至の日に執り行われていた。新年を迎えるにあたり九曜の星を祭り、善星皆来・悪星退散と招福を祈る行事で「吉凶（禍福）は糾（アザナ）える縄の如し」の所以である。

近年、星供（ホシク）を詳しく理解している人がいなくなったことで宿は次第に集まりの場が変わった。

大宮神社（人見）

一〇月

✦秋祭り

一七日は、大宮様の祭礼。久保の大宮神社と同じ日に、旧日ノ出町の人たちが赤飯を供えてお祝いする。

お詣りした時、先にお詣りした人の

赤飯をお返しとしていただけるという習わしがあるそうだ。

日枝神社（大和田）

一月

✦湯の花神事

昔は「湯浴び」と呼び、旧日枝神社で五穀豊穡、大和田浦で豊漁祈願を行っていた。

湯の花神事は、四隅に青竹を立て注連縄を張り巡らした中央に大釜を据え、沸騰した湯の中に束ねた熊笹の葉をくぐらせたあと四方八方に撒き浄める。終わった後、参列者は神事に使った笹、焚いた後の炭や薪など持ち帰って自宅



湯の花神事

の門柱や軒下に吊るして家内安全の守りとした。

日枝神社も春を迎えるための火祭り行事「どんど焼き」と同じような意味があり正月飾りのお炊き上げをする。

坂田八幡神社（坂田）

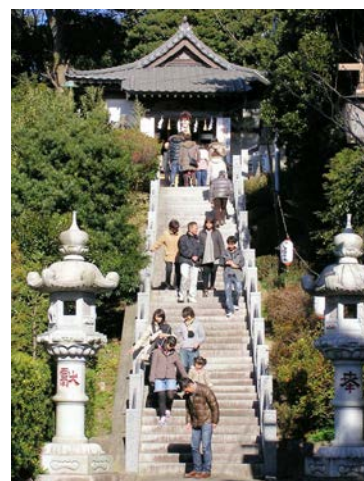
一月

❖初詣

大晦日の夜は、神社境内に年越しの



大晦日 幻想的な境内の夜景



初詣風景

参拝に訪れる善男善女を迎えるため、鳥居から神社に上る石段付近や境内に篝火が焚かれ参道を明るく照らす。

社殿前に大勢の初詣の人が並び年明けと同時に詣りが始まる。社務所には絵馬・破魔矢・お札などが並び、境内ではお神酒と甘酒が振る舞われる。

二月

❖節分祭

三日、坂田八幡神社の境内で節分祭が行われる。節分とは季節を分けるという意味があり、立春の前日に豆をまいて邪気を祓い一年間の厄除け・無病息災を願う。

坂田八幡神社では神事が執り行われ



節分祭

その後、紅白の幕を張り巡らした舞台の上から福豆・福餅・お菓子などが撒かれ子供から大人まで先を競って福を拾う。そしてこの日は、しめ飾りやお守り札などを納める。この節分祭は、平成に入ってから始まった比較的新しい行事である。

❖春の祈年祭

一五日、新年を迎え新たに五穀豊穡・



湯の花神事

無病息災・家運隆盛を祈願する祭事で、春祭りとも言う。式典後は境内で伝統の「湯の花神事」が行われる。

境内の一角の四方に青竹で支えられた注連縄が張り巡らされる。その中央に大釜が据えられ大釜の湯がぐらぐら沸騰した状態となったところで宮司が青竹二本を束ねた棒で釜の湯を混ぜ、熊笹の束で湯花を前後左右に撒き境内

を浄め神社役員、氏子らも浄められる。
九月

❖ さかだの祭り（坂田）

さかだの祭りは九月半ば過ぎの日曜日に
行われ、氏子・神社関係者が祭礼の
数日前から神社内外の宮薙をする。

1、宵まち

祭り前夜、子供達を車に乗せたお囃子が町内を二度ほど回り笛や太鼓で祭り気分を盛りあげる。

2、幟立て

早朝、八幡神社一の鳥居に幟が立つ。



3、注連縄作り

鳥居につける大注連縄を作るグループと注連縄につける房を作るグループに分かれて作業する。大注連縄の縄の数は、一の鳥居五四本、二の鳥居四八

本、三の鳥居四二本。三本の綱を二台の「じゅっちょう」で「より」をかけ、よりのかかった綱を「おさ」で一本にまとめる。「じゅっちょう」は、昔、漁



2台の「じゅっちょう」で大注連縄作り

業で太綱を作るときに使われた道具。二台一組で使用し、一台は杭を打って固定、もう一台は車がついていて「より」がかかる前に移動する。「おさ」は魔法使いの手の様で、見る見るうち

に「太注連縄」が出来上がり、皆さんの息の合った掛け声と手際の良さに拍手喝采、賑やかだ。

小さい注連縄は宇和手宅の庭で藁を



手作業で藁を「なう」

「なう」。これは手作業でコツがある。昔取った杵柄で熟練者が新人に手ほどきをしながら作業が進む。

しめ縄づくりは昔からこのようにして伝えられてきた。小さい注連は束ね

て房にし、御幣とともに大注連縄に取り付けられ、出来上がった大注連縄は一の鳥居・二の鳥居・三の鳥居の順に鳥居に取り付けられる。



二の鳥居に大注縄を取り付ける

4、お振り奉納

祭礼は午前九時から式典が執り行われる。神社下の神輿堂前ではお振りが若衆に担がれ、一揉みして一気に石段を駆け上がり拝殿に投げ込まれる。

お振りは一二尺、一二節の真竹に鯛二尾を腹合わせに吊るしたもので海上安全と豊漁を祈願する意味がある。

5、入魂の儀（御霊入れ）

お振り奉納が終わると弊殿で官司より氏子会会長へ御霊が奉遷される。絹垣（キンガイ）に覆われた御霊は官司を先頭にしらずと石段を下り、神輿堂の前に置かれたお神輿の前まで進む。一同勢揃いしたなか、氏子会会長の手によりお神輿に御霊入れされ厳かに儀式が終わる。



「お振り奉納」

6、
神輿渡御



御霊入れ



絹垣で覆われた御霊

神事の全てが終わると花火の合図で山車と共に神輿渡御となる。
八幡神社を出たお神輿は途中休憩をとりながら、坂田記念館、協立工業前、秋香園付近で折り返し千成の順に渡御していく。五竜公園に着いたところで休憩となり毎年恒例のイベントが催される。
その後、堺田公園を経て西坂田付近



神輿渡御



やく鳥居前に来て、最後の揉み合いが



平成 26 年イベント「つくしのもりたいこ」

を巡り、夕方四時ごろ八幡神社前に帰ってくる。7、宮入り
神社の前にお神輿が戻って来る頃には大勢の人が集まってきて祭りは最高潮に達する。
揉みに揉まれたお神輿はよう

始まる。宮入りを拒むように「いきつ、もどりつ」再度揉まれる。お神輿が鳥居をくぐると同時に宮入りを知らせる花火が上がると神輿渡御は終了する。8、御霊遷し

宮入したお神輿は御霊遷しの儀式となる。お神輿は絹垣に覆われると、氏子会会長の手により御霊が取り出され、絹垣に覆われたまま宮司の先導により石段を上り拝殿に入る。御霊遷しが済



恒例の「紅白餅まき」

んだお神輿は神輿庫に納められ、境内で紅白の餅撒きが行われ直会になる。翌朝、幟かえしと道具じまいを執り行い「さかたの祭り」は終わる。一二月

❖秋祭り（新嘗祭・皇大神宮祭）

一五日、午前九時より新嘗祭・皇大神宮式典・湯の花神事が行われる。新嘗祭は民間儀礼と宮廷儀礼がある。民間は、新穀を神々に供え、神々が新嘗をすることにより巡幸を願う祭りで収穫儀礼として行われている。

地域の安泰・五穀豊穡に感謝し家内



秋祭り(皇大神宮祭)

安全・商売繁盛・交通安全などを祈願する行事で献穀米の受付がある。皇大神宮前で皇大神宮式典が執り行われ、境内では春祭りの時と同じように湯の花神事が行われる。

❖七五三祝祈願

弊殿では宮司による七五三祝・子育ての祈禱が執り行われ、子供の健やかな成長を願う親子連れが詣でる。



七五三参拝

△御開帳・御開扉

御開帳（ゴカイチョウ）は、厨子の帳（トバリ）を開けること。御開扉（ゴカイヒ）は、厨子の扉を開けること。青蓮寺は御開帳。長福寺は御開扉と書いてゴカイチョウと読む。

第二節 寺院

青蓮寺（人見）

一月

◆寺年頭

元旦の午前中、檀家の人達がお寺にお年賀のご挨拶に行く。

四月

◆御影供会（ミエクエ・ミエイクエ）

平成二七年四月二一日、近隣の真言宗各派八ヶ寺（智山派真福寺・智山派福恩寺・智山派大福寺・智山派東福寺



富津市小久保真福寺（平成 27 年）

・豊山派青蓮寺・豊山派観蔵寺・豊山派竜善寺・豊山派附属寺）の住職により、富津市小久保真福寺で御影供会が

執り行われた。

八月

◆お盆・施餓鬼（セガキ）

お盆は、正式には盂蘭盆会（ウラボンエ）という。盂蘭盆とは、古いインドの言葉「ウラバンナ」の音訳で「逆さまに吊るされたような苦しみ（地獄の苦しみ）」という意味。この地獄の苦しみを受けている人々に対して、この世から供養することの功德によって、その苦しみを救いたいという願いを込めて営まれる。

施餓鬼は、お盆の頃に行われる仏事で、餓鬼（飢えて苦しみに落ちた精霊）だけでなく三界万霊（この世に存在するあらゆる精霊）や無縁仏に施しをする供養。施餓鬼会は、施餓鬼棚が作られ「みずのこ（上段にご飯、中央の飯台に蓮の葉が敷かれ、中央右に細の目に切った茄子のあられなど）」がお供えられる。

作法は、先ず焼香してご飯を取り、その上に茄子のあられをのせて、ミソ



施餓鬼棚

ハギで水をつけ、蓮の葉が敷かれた中央の飯台にご飯・茄子を入れミソハギで水をかける。盆が過ぎた日に多くの檀家が参列して行われる。

九月

◆近江屋甚兵衛供養



近江屋甚兵衛供養（明治 44 年）

近江屋甚兵衛の墓は明治四四年三月、前畑より青蓮寺に改葬された。毎年一二日、漁業組合世話人により顕彰会が

行なわれてきた。漁業組合解散後は青蓮寺檀家総代が引き継ぎ法要を営んでいる。

十二月

❖除夜の鐘（年越し御護摩）

除夜とは「旧年を除く夜」という意味で、深夜零時を挟む時間帯に煩惱を除く思いを込めて寺院の梵鐘を一〇八撞く。毎年、大晦日には檀家の方々のお世話で境内に篝火が焚かれ、檀家や



除夜の鐘

参拝者が鐘について煩惱を祓った後、人見神社に詣でて新たな気持で新年を迎える。

❖その他（御開帳）

御開帳は、昔、娯楽が少なかった時代に信仰とレクレーションを兼ねて始まったと考えられている。

君津周辺では観音様の御開帳が通称牛観音といわれ丑年に開催され、その中間六年目ごとに中開帳も実施されている。近隣の観音霊場札所は、小糸作



御開帳（平成20年）

札と呼び札所ごとに番号がついている。青蓮寺は一番札所で、御開帳の時は触れ元となり開催日時などを各札所に知らせる。

お寺の参道や境内には南無観世音菩薩と書かれた御開帳の赤い旗が立てられ、風にたなびき荘厳な雰囲気漂う。

本堂には御本尊様が御開帳され、お手に善の糸が結ばれ、その先は本堂前



回向柱



十一面観世音

の回向柱に結ばれている。回向柱は供養塔婆と同じで御開帳が終わると寺に納められる。

御開帳の期間は大勢の参拝者が各札所を巡拝する。お寺では接待があり檀家の人達が当番制でお茶やお菓子、赤飯でおもてなしをする。昔は、観音堂がある村落間でお参りに行く習慣があり交流・親睦の場だった。

巡拝者は、ご本尊様を慶讃する意味と接待者へのお礼の意味で和讃・ご詠歌や踊りなどを披露して賑わった。近年は巡拝者の数も少なくなりこの風習も次第に薄れつつある。

青蓮寺 観世音菩薩御詠歌

「安楽の世界もここに人見山

大悲のちかい深きうなばら」

青蓮寺二十三番札所に当たる薬師如来様の御開帳は通称寅薬師といわれ、寅年（平成二二年）に開催された。

青蓮寺 薬師如来御詠歌

「南無薬師ちかひもふかき人見浦
みのりの船もここにこそあれ」



薬師如来

その他、地藏菩薩の御開帳が六〇年に一回あるが住職一代で二度巡り合うことは少ない。近年、地藏堂の減少に伴い仕来たりや神仏への帰依、信仰心が希薄になっている。これらの信仰・風習は時代が変化する流れの中で風化しつつあることは残念だ。

慈安堂（神門）

四月

✦ 灌仏会（カンブツエ）

釈迦の誕生を祝う法会で毎年八日に行われる。その他、降誕会・仏誕会とも呼ばれる。

釈迦が誕生したとき、天から竜が下りてきて、香湯の中に入浴させたとい

う言い伝えから、各寺では花御堂の中に甘茶を入れた水盤を置き、その中に釈迦像（誕生仏）を安置して入浴させる。一般的に「花まつり」の名で親しまれている。



仏教法会の本尊（誕生仏）

神門地区婦人会の数人が細々と守り続けて来たが平成二六年四月が最後の花祭りになった。また、毎月行われる一四日念仏を始め念仏講も熱心に行われて来たが、総名さんの高齢化による後継者不足で先行きが懸念される。

坂田長福寺でも昭和三〇年頃まで行われていた。

長福寺（坂田）

一月

◆新春の御祈禱

大晦日から元旦、初詣を済ませた檀家や地域の住民は新春のお参りをして、長福寺の境内で御汁粉の接待を受ける。



新年の長福寺

◆寺年頭 一月一日

一〇時より寺年頭が始まり御先祖様にご挨拶をする。

◆仁王会（ニンノウエ）

仁王会は、正月の第二日曜日に行われる。前日から檀家が集まり本堂に紅

白の幕を張り舞台を作る準備に取りかかる。当日はお札（紅白熨斗袋）が配られ「御祈禱料」または「お札料」と名前を書いて祭壇に供える。多くの檀信徒が集るなか、一二時過ぎにご住職の法話が始まり、本堂でご先祖様の供養と平和祈願が行われる。



仁王会（平成 25 年 1 月 13 日）

〈仁王会の起源〉

齊明天皇六年（六六〇）に始まり、奈良・平安時代には年中行事化し、宮中の大極殿・紫宸殿（シンシデン）・清

涼殿などで行われた。仁王会は、一年の年の初めにあたって日本の国や檀家の皆様方、それぞれの家々が平和でますます繁盛するように祈願する。天照皇大神を中心として八幡大菩薩・春日大明神をはじめ諸々の神々に祈りを捧げる。お経は錫杖経・般若心経・仁王経また神々の真言。

錫杖経では、当願衆生（人々の願うところは）と唱えながら、人々の生活に鬼神（悪い神）や悪霊（悪い霊魂）のたたりがないように、また、この世を人々が日々生活する中で悪いものに騙されたりいろいろな心の悩みで苦しむことのないように錫杖をふって祈る。般若心経では、日常、私たちが生活をしていく中で、沢山の情報を耳や目にする。そのような中で正しくものの判断ができ、他の人々に迷惑をかけないように、間違った生き方をしなくてすむように祈る。

仁王経では、年の初めにあたってこの一年、太陽・月・星の巡りが順調で

正しく季節がめぐって、大水・大火事・日照り・噴火や大地震などの自然の災害がないように、戦争や争いごと、その他の事故などに遭わないように祈る。

(長福寺 諏訪好紹住職記)



仁王会掛軸

〈坂田長福寺「仁王会」の変遷〉

昭和三〇年前半までの仁王会は、住職が檀家のお伴でお札(仁王経)が入った箱を持ち、近所の子供たちと一緒に各家を回り新年の法要をした。

昭和三〇年代後半になると、八幡製鐵の進出で海や田圃がなくなるなど家庭環境にも変化が生じ始めた。それで、一軒一軒出掛けるのはやめて組の班長



演芸会

の家に集まり組単位でおこなうようになった。この方法も社会構造の変化で厳しくなり昭和五〇年後半、檀信徒で話し合い正月の第二日曜日にお寺で仁王会を執り行うようになった。

皆がお寺に集まるよい機会なので、仁王会が終わったあとと親睦を兼ねて新年会を開催することになった。新年会はテーブルに飲み物・お菓子・みかんが並び、カラオケ・フラダンス・證誠

寺の狸囃子、最後は福の神による「福」をもたらす抽選会などで賑やかなひと時を過ごす。

四月

✦御影供会

祖師の命日に御影を掲げて供養する法会(ホウエ)だが、ここ数年前から行われなくなった。その頃は八日が御影供で弘法大師様の御恩姿(ゴオンシ)像を出して法要をした。



真言宗祖 弘法大師御恩姿像

御影供というより「めいこ」という言葉で親しまれている。弘法大師の入定をしのぶ追悼会は昔からこの地方の各寺々の行事として定着していた。

古老の話では「めいこ」の当日はお寺の境内に舞台が生まれ、素人芝居や

お店が出て大変にぎやかな楽しい行事だったが、大正・昭和の不況や戦火の拡大で次第に消滅していった。

昭和五十九年が弘法大師の御遠忌に当たるので、真言宗では様々な記念行事が計画された。坂田長福寺でもこの時期を機会に、御影供と厄除け地藏会を合わせて復活させ、五月二七日に開催の予定である。

(昭和五十四年三月一八日「坂田自治会報4号」掲載)

八月

❖ 施餓鬼会 (セガキエ)

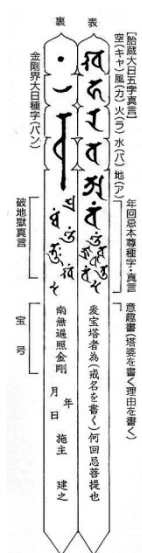
お盆の時期は、多くのお寺で施餓鬼会と呼ばれる法要を営む。施餓鬼会は、餓鬼道に落ちて苦しんでいる霊を救うために食べ物を通して供養する法要だが、無縁仏(ムエンボトケ)を供養する法要でもある。

毎年十一月には、年末施餓鬼会と家内安全の護摩供養も行われる。

❖ 塔婆 (トバ・トウバ) 施餓鬼会

お墓にみんなで行き、お経を頂いた

あとに卒塔婆をお墓の後ろに立てて供養する。



お寺さんによつてはお盆に檀家を集めて行うところもあるようだ。卒塔婆やお経をあげてもらったら、あとは通常のお墓参りと同じでお供え物や、お花、お線香をあげてお参りする。

❖ その他 御開扉 (ゴカイチョウ)

長福寺では御開帳を御開扉という。

観音様の本開扉は丑年、中開扉は午年。御開扉はお寺ごとに御本尊様が違うので、その御本尊様のあるお寺に札状が配られ日程が決められる。

お寺の境内や参道に御開扉の赤い旗が立ち、本堂には御本尊様がお開扉される。御開扉は観音様と手を繋ぐという意味で、回向柱から正面までは晒の紅白の紐でつながれる。本堂の中は、玄関から仏様の手まで五色の糸で結ばれ、回向柱から本堂まで繋がっている



観音菩薩の御開扉

白い布をお手綱という。お手綱に触ることで仏様と繋がりが仏様と手を結ぶ事ができる。

御開扉の期間は各寺のご住職を先達に近隣から大勢の人達がお参りにくる。観音様の時は観音経を唱えるが、現在は「般若心経」を唱えている。お寺では接待があり、檀家の人達が当番制でお茶やお菓子でおもてなしする。

第三節 地域行事

昔から地域で継承されてきた風習・行事があるが、その中には社会環境の変化で今後途絶えてしまいそうなものがあり危惧されている。

新たに住民となった人達には見聞する機会が少ないが、現在も周西のどこかで行われている風習行事を記録する。

二月

❖ しめ縄張り

無病息災を願う旧正月に行われる民俗行事でドンド焼きと同じ趣旨がある。

坂田では節分が過ぎた吉日、組単位で村境や道路脇（※五カ所）に張り、終わると自前料理で御神酒を捧げ新年の幸せを祈った。村境にシメを張ることにより、自分達の住む場所に一歩たりとも悪魔や悪疫が忍びこまないようにとの願いがこめられた行事で、この風習は現在も続けられている。

※場所詳細図：本章 139 頁参照



また、宮崎宮司に伺ったところでは、必ずしもそうではなく、節分を過ぎれば暦の上で立春。草木が萌え、虫も地から這い出て森羅万象盛々発展の意気が盛んになる季節であり、春を待つ心、自然の恵みを尊ぶ心、感謝する心、そして地域社会が幸せになれるように祈る年越しのまつりの意味合いもあるそうだ。

❖ しめ縄張り

人見は村境に三カ所あった。大和田地区にも同様な風習が残っていたようだが、近年の急激な都市化の波と高齢化で記憶が定かでなくわからない。

❖ 春の百万

各家庭では厄病除け、悪魔よけ、悪病除けとして注連縄を張り、地区の共同祈願として行われる。人見は毎年二月一五日に人見青年館で、神門は毎年三月一五日（旧暦二月一五日）厄神様前の広場で行われた。

ご婦人や子供たちが注連縄、または注連を作る蓍（シメワラ）を持って広場集まる。持参した蓍には椿や庭桜などを目印につけていた。参加者



人見の百万（地区の厄除祈願）

はその注連縄の山の周りにムシロを敷いて車座になって座る。

最長老の「そうみよう」様がお神酒を注連縄に掛けたあと「南無阿弥陀仏」と唱え、他の人たちが続いて「南無阿弥陀仏」と唱和しながら、お数珠を天道回り（時計方向）に二二回まわす。その根拠は、人見神社の祭礼である二二日に由来するようだ。

光明真言を百万唱えることによって祖霊を供養し、また自らの死後の成仏を願う仏教色豊かな庶民信仰であったが、昭和四〇年代で終わった。

❖注連ない

一五日、人見地区では各家単位に市道から自分の家に入る路にシメ縄を張り渡す。

これは正月や祭礼の時だけではなく一年間張られている。このしめ張りは地区の共同祈願として行われているもので、地区内や各家の厄除けや悪病除けとしてお呪いするもので現在、注連を張る家は数軒にとどまっている。

❖七月 七夕祭り



七夕祭り(坂田商店会)



門柱に張った注連縄

八月

❖灯籠流し

いつ頃から始まったかわからないが二四日に実施していたようだ。平成二四年に復活し、小糸川下流域の人見橋付近で行われている。

七日頃、坂田商店会で七夕祭りが催される。駅前広場や夕焼け通りに願い事を書いた短冊などがついた笹竹が飾りつけられ、駅前公園で歌や踊りのイベントがある。



灯籠流し（小糸川下流）

第四節 家庭行事

昔から各家庭で継承されてきた風習・行事がある。しかし、近年、社会環境が大きく変化したことで、先人から受け継がれてきた伝統的な風習や行事などが現代の文化的な合理性の中に埋没しつつある。残された情報を収集・記録し後世に伝承する。

一月

❖年男

正月三ヶ日は、家長や長男が食事を作る。

❖門松

門松は年の初めにあたり、年神様をおまつりするためのもので内飾りが本来の姿。それが時代とともに門や玄関



に飾るようになったといわれる。

❖お飾り

一二筋垂らすお飾りは新藁をすぐつて作り、御幣・橙・裏白やゆずり葉を付けて年神様と玄関の二か所に飾る。一夜飾りはいけないといわれ、二八日または三〇日に作って飾る。台所にはかまどの神様(荒神様)。井戸には井戸神様を祀る。



❖年神様

年神様は元日に来る神様で、その年の守り神様をいう。今年一年無事に過ごさせてもらうことを祈願する。

お供え物は、鮭・鯉節・昆布・すめ・麻・鯛・干し柿など。年神様の祭



年神様のお供え物

壇を年神棚といい、一般に大神宮が南向きに設けられているのに対して東向きが多い。この年神棚は男衆が作り二か所に松飾りが取り付けられる。神宮から配布された年神様を「あきの方」(新年の恵方)に飾る。



❖蔵開き

一日注連縄を張りお餅を供える（人見）。蔵を開きお膳に御神酒とお餅を上げ御燈明を灯す（坂田）。

❖お飾り納め



お炊きあげ

お飾りは一五日に納め、庭のきれいな場所でも燃やした。また、節分に燃やした灰は家の回りに

撒いて無病息災を願う。坂田では「納めの朔日」といい、二月一日に行われていた。

❖送り恵比寿

恵比寿様に一年の無事を感謝し五穀豊穰・大漁、あるいは商売繁盛を祈願する。

一月恵比寿は送りえびすという。これから働いていただくためにご飯、ご馳走は少なめにし、一升枡の中にお財布などを入れてお供えする。

二月

❖節分



えびす講のご膳

立春の前日の夜を年越しと言った。各家庭では門戸にヒイラギの枝にイワシをつけたものをさし、夕方には豆まきを行う。豆は神棚、お稲荷様、井戸などに撒いて清める（人見）。

坂田では、昔は節分をした後で正月飾りや門松を集めて田圃でどんど焼きをした。

❖初午（ハツウマ）

立春後の最初の午の日を初午といいお稲荷様の祭日とされる。

人見では、豊作を祈る意味で茶の子飯と言つて、うるち米にササギを混ぜて炊いたご飯と油揚げをお稲荷様に供える。

小麦粉を練り、だんごを片方だけ細長くしたオシトゲを一二個作りアサリ貝と一緒に稲荷様に上げる。

❖山神様



節分 ヒイラギ



二月七日と一月七日は山の神様の日といわれる。お赤飯や酒などをお供えて山仕事の安全を祈願した。



この日、山に入ると怪我をするので仕事は休んだ。『山神講の日には木を切るものではない』といって、大神宮様にお神酒・赤飯・豆腐を供えて内祝いをする。米、赤飯は茅の軸で食べた。

また、この日は山の神が樹木の数を数える日なので過って山に入ると災難が降りかかると言い伝えられている。

三月

✦ ひな祭り

桃の節句とも言われ女の子の節句。初節句には母方の実家から雛人形が届けられる。



前日に餅をつき、紅白の菱餅や草餅を作り、白酒、ハマグリの吸い物やお寿司などと一緒にお雛様に供えた。お雛様は、早めに飾り、早く仕舞わないと婚期が遅れるという言い伝えがある。

✦ 春の彼岸

春分の日を以て前後三日の七日間を春の彼岸という。各家庭ではお彼岸に入る二三日前にお墓の掃除をし

てお墓参りをする。

四月

✦ 代掻き

田圃に水を張り土を細かく砕いてかきならし、平らにする田植え前の作業だが、田圃が減り周西では人見五丁目で見られない風景になった。



代掻き

✦ 田植え

四月上旬頃から「種もみ」の準備に入り、中旬に種苗箱に肥料を加えた土を入れ「種まき」の準備をする。

育苗箱に蒔いた種もみをハウスで育てる。種もみから芽や根が出て一〇cm位に育ったら苗を田圃に植えるのが一般的で、当地方では四月上旬頃から田植えがはじまる。



田植え風景（平成 25 年頃）

五月 ❖ 端午の節句

五日は、男の子のすこやかな成長を祈願するため鯉幟や武者人形を飾り、かしわ餅などを食べてお祝いする。

菖蒲は「邪気を払う」意味で用いられることから、菖蒲の葉とヨモギを母屋の庇に投げ上げ邪気払いをする。また、菖蒲湯に入ると一年間、息災で風邪をひきにくいという風習がある。



こいのぼり（周西幼稚園）

七月

❖ 井戸掃除

大正期から昭和三年頃まで、七夕の頃になると年に一度の井戸掃除をしていた。

井戸がある旧家の多くは現在でも庭の水まきなどに使っている。



井戸掃除

八月

❖ 高灯籠（タカトウロウ）立て

新盆の家では一日に親戚が集まり、庭に高灯籠を立ててくれる。灯籠は仏様が見やすいように門の近くに立てられた。灯籠が立てられたあとは、組の人をもてなすのが新盆の家の務めとなっている。

この灯籠は仏様がお灯明を頼りに来られるよう一日から火が灯され、三日まで毎夜灯かりをつけ建てておく。現在も時々見かけるが次第になくなりつつある。

❖「ボンミチナギ」と「盆供（ボンク）」
盆道づくりの伝承は全国各地にあり「道なぎ」「墓なぎ」という呼び名が残っている。当地で言い習わされている「ボンミチナギ」はこれによるものだ。七日、共同墓地のある地区では、参道と墓地の掃除を地区総出で行い、きれいに掃除したあと、全部の墓石の前に竹の筒（ポーポ）をさし、香の花（しきみ）をあげたが、現在では社会環境



現代風「高灯籠」（平成 26 年）



盆棚

の変化や地域性などから個人で行なうことが多くなっている。
一〇日は、寺の檀家がお寺に米などをもっていく盆供という習慣があるが、日にちは地区によって異なる。
❖ 盆棚づくり
一三日の午前中、家の主人が仏壇とは別に祖霊を迎えて祀るための特別な棚を作る。「棚を吊る」ともいう（新盆の家では一二日）。
棚の上段はご先祖様、下段は無縁仏

❖ 迎え火
盆棚が出来たらタライに水を汲み、



帰る時はゆっくり
帰るように
ナスの牛



来る時はできるだけ
早く来られるように、
キュウリの馬

様となっている。仏壇の前に女竹（メダケ）を二本（三m位）立てて簡単な台を作り、野菜や果物などを供える。仏様が帰ってきてきて仏壇にのぼるために「オガラ」ではしごを作ってかけておく風習があった。
また、キュウリで馬、ナスで牛を作り、尻尾はトウモロコシの毛を使い、足は「オガラ」を切り刺して作る。

家族全員で迎え火を焚いて、ご先祖様の霊を迎える（新盆の家は一二日）。

❖お花買い会（エ）

一四日の夜、おにぎりに「オガラ」の箸をさして仏様にあげる。

一五日の未明に、仏様が天竺にお花を買いに行く習わしがあることから、仏前にお金を上げて玄關を開ける。夕方には戻るので玄關前にタライに水を汲み足を濯（ユス）ぐ用意をする。



仏様のお弁当

❖送り火

一六日夕方、送り火を焚いて仏様を送る。送り火にはオガラ、紅花を使っ



ていた。

❖刈入れ



比べて農作業が随分楽になった。刈りとった稲の小束はオダカケにし天日干しする。

八月終わ
りから九月
にかけて稲
刈が始まる。
稲刈りは、
鎌で刈り取
るのが一般
的な方法だ
ったが、農
器具の発達
で機械化が
進み、昔と

九月

❖お稲荷様

二〇日頃に行われる「さかだの祭り」の時、神社より幣束をいただきお稲荷様に納める。さかだ祭礼の日の早朝、ゆずり葉を敷いた上に赤飯と甘酒のもとを載せてお稲荷様にお供えする。

❖お月見

十五夜の月見は一五日（旧暦、八月一五日）の夜に行われる。この日、月の出を待つ縁側にススキを飾り、月見団子・サトイモ・サツマイモ・栗・柿などをお月さまにお供えする。

人見の旧家では、十五夜はしないで十八夜（ジュウハツチャ）にお月見をする。お供えは十五夜と同じだが、お米を載せたお盆を頭に掲げ、家族一同



お稲荷様のお供え物

並んで月を眺めたとのことである。

注…旧暦の八月一五日は、毎年九月中旬より一〇月上旬に当たる。

❖ 秋のお彼岸

秋分の日を以てさんで前後三日の七日間を秋の彼岸という。寺参り・墓参りなどして先祖供養をする。

一二月

❖ 冬至

昔からゆず湯に入りカボチャを食べる風習がある。

❖ 星祭り

毎年、天空の星神を祀って人々の災いを払い幸福を招くよう祈願する行事で、冬至の日に神様に参拝してゆずを供える。

坂田宇原では昭和三〇年代まで星供の宿を実施していた。みかんと餅を宿に持ち寄り焼いて食べる習慣があった。このみかんは小さくて種が多かったことから「腹たちみかん」と呼んでいたそう。

近年、星供（ホシク）の行事を詳し

く理解している人がいなくなったことで、宿は次第に集まりの場が変わった。この風習もやがては忘れられてしまうのだろう。

❖ 迎え恵比寿

外働きしていた時代の名残だろうか。一月を「送り恵比寿」というのに対して、一二月は

「迎え恵比寿」ともいわれる。

一年間の外働きに「御苦労さまでした」という感謝をこめてご飯・お煮しめを多く盛り、お金もたくさんお供えし迎えた。

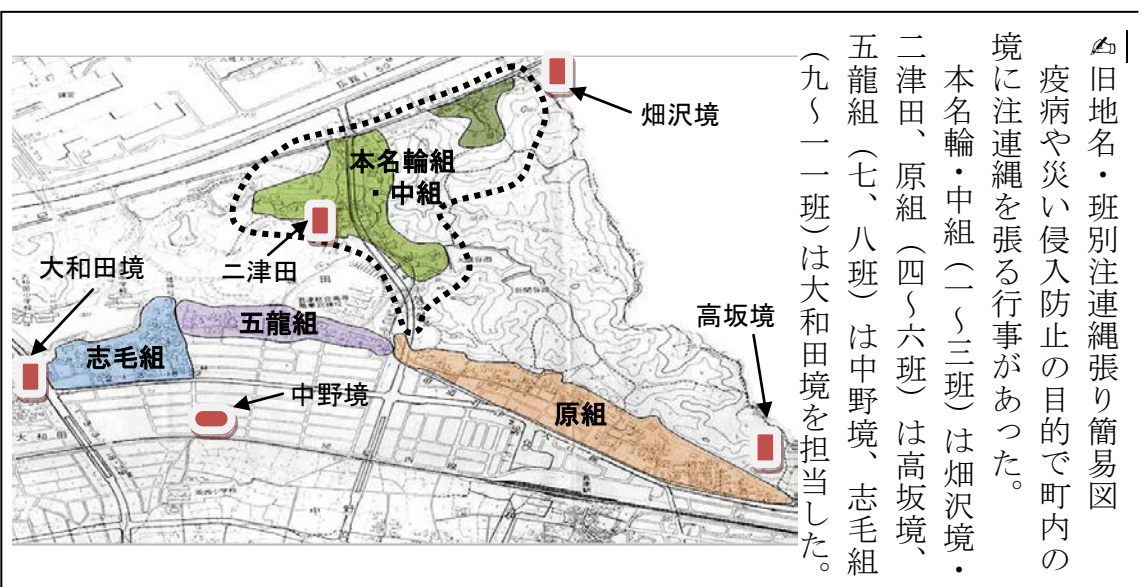
三地区とも十一月二〇日だが、十二月二〇日に行う家もある。

❖ 大晦日 十二月三十一日

年の瀬の仕事を終え、新年を迎える準備が整うと家族揃って年越しそばを食べる。



恵比寿様





人見神社例大祭
神輿：人見 鉾：大和田
昭和 50 年頃



坂田八幡神社
境内整備竣工祝賀射会
昭和 60 年代